

# 幼稚園における教育課程をふまえた教育実習と 幼児期の教育方法のあり方

## A study of the practicum of teaching practice and the educational method of early childhood on the basis of understanding the curriculum in kindergarten

小林 研 介\*

Kensuke Kobayashi

### Abstract:

In this paper, following 2 issues in the college for training student to be a kindergarten teachers are discussed: at first, when the students do their practicum of teaching practice, whether they took into account the curriculum. Second, the methods of the practicum of teaching practice are appropriate or not.

### キーワード:

教育課程、教育実習、指導計画、指導案、教育方法

### Ⅰ. はじめに

この論文では、保育者養成学校において、①教育課程の存在を考慮に入れた教育実習がなされているか、さらに②教育実習のなかでのその実習方法が適当であるかについて、考えて見たい。

教育課程と長期の指導計画、そしてその日の教育・保育のあり方の関係性を考えているか考慮にいれているか。それは教育実習のみならず、教育・保育を進める上で大事な点であると考えからである。

また、乳幼児の発達の過程を無視して保育を行っている現状もよく見かける。無視は言い過ぎにしても、そのことを十分に考慮に入れない実習も問題であろう。

これまでは幼稚園は「教育課程」、保育園は「保育課程」、幼保連携型認定こども園は「全体的な計画」という語句を使っていたが、

平成30年4月よりすべて「全体的な計画」という語句を使用する。ただしこの論文では教育課程という語句で統一することにする。

### Ⅱ. アンケート調査と考察

#### 1. 調査手続と結果

その実際を求めてアンケート調査を試みた。アンケートの実数は養成機関（短期大学）2年生80名、佐野地区幼稚園（認定こども園も含む）教諭40名で2018年1月中旬に実施した。質問は以下の簡単なものである。

- 1) 養成学校内で幼児の「教育課程」という語句を聞いたことがある。
- 2) 教育課程とはいかなるものか説明できる。
- 3) 実習時の教育実習は教育課程を意識

\*佐野日本大学短期大学 総合キャリア教育学科 非常勤講師

- して行った。  
 4) 保育者になった時教育課程を求めた(求める)。

ての幼稚園で持つものであり、その幼稚園の教育(保育)の根本である。

平成30年の4月1日から実施される、最新の幼稚園教育要領の前文のなかには

このために(教育基本法11条)「必要な教育のあり方を具体化するの、各幼稚園において教育の内容等を組織的かつ計画的に組み立てた教育課程である。」

とある。

実際に保育現場にて教員の理解が進むように新人教諭研修の場面では園長として、私はこのような例え話で説明する。

「新人の先生が園に入ってきた時、当然のことながら新人研修が行われる。その内容は社会人としての自覚や、職務に関すること、さらに言葉遣いや電話の対応まで多岐にわたるが、園長として一番大切にしたいことは、その園の教育の大綱である教育課程の説明の時だ。いつも私はこんな風に説明する。「これは当園の教育課程です。あなたは保育をする時、またした後時々これを見て欲しいと思います。ところであなたは車の運転をしますか?もし今まで一度も行ったことのないところまで運転して行くとしたらどうしますか?そうですね。ここから大阪

## 2. 回答結果からの考察

- ①学生は(または学生時代には)幼稚園教育課程という「講義」はあり、その語句自体は知っている。
- ②しかしその内容を説明できるのは2割程度であり、その意味を理解しているとは言いがたい。現職は約2倍の理解がある。それは実際に保育で活用していることがその理由であろうか。
- ③教育課程とは何かを説明することは難しいが、意識して実習を行ったのは半数弱であった。現職教諭は時間的な古さが意識の低さにつながっているのだろうか。学生より低い数値である。
- ④教育課程の活用が各施設に浸透していないことがうかがえる。「貰わない」教育課程が無くとも保育できると考えるが数(現職は)が45%(30+15)になっていることには驚く。

## III. 教育課程とは

教育課程とは(平成30年4月より「全体的な計画」と呼ばれるもの)発達を加味した教育の道筋の提示されたものである。卒業までに子供がどんな発達の道筋で育つかを教員全体で考えて共有する。よって全

表1 実習時の教育課程の認識実態

学 生 80名 保育者 40名	教育課程という語句を養成機関で聞いたか	教育課程を説明できるか	教育課程を意識した実習を行ったか	教育課程を園から(施設)貰うか
ある学生	95%	20%	45%	64%
ある現職	95%	38%	28%	55%
不明学生				33%
不明現職				15%

まで行こうとします。多分地図を開きルートを決めますね。東北自動車道で東京まで行き首都高速を走り東名、名神のルートでしょうか。まだその他にも行き方はあるでしょうが、おおよそその道を通るのが距離的にも時間的にも無駄の無い行き方でしょうね。つまりまず目的地に向かうために基本的なルートを考えるわけです。もし走っていて富士山が見えてこなければ、あれーこの道でいいのかなと思わなくてはなりません。目的地に向かう運転は目標とする幼児像に向かう保育と同じです。ところどころに見えてくる建物や山や川は行き先が大筋で違っていないかを確認できる灯台のような場所です。もしあなたが初めての場所に行くときに地図を持っていないとしたら不安でしょうね。間違った方向に行っていないか。これで目的地に行けるのかと考えてしまうでしょう。だからと言って地図ばかり見ていたら運転はできません。たぶん交差点なんかで止まった時、ちらっと地図を確認すると思います。教育課程もちらっとたまに見てください。そして間違っていないな。とかそろそろ川を渡るぞというふうに確認したり、予測したりしてください。ですからこの地図は大まかな地図なのです。あまり細かな市街地の地図では使いづらいと思います。教育課程があまり細かすぎたら使いづらくなるのは同じ理由からです。ただし、地図と現実、ずれているときもあります。台風で橋が流されたり、新しい道路ができたなんてこともありますから、その地図がずっと正しいものであるかというところでもないのです。だから教育課程も時々現実である目の前の子供の実態をよく見て作り変えなくてはなりません。また行き先も変わる場合もありますから。もしあなたが一度も

入園から卒園という子供の発達の道を通ったことがないなら、なおさらこの地図は手放せませんね。そのことをよくわかってください。」

この例え話は以下のことを説明している。

- ①教育目標と教育課程の関係
- ②教育課程の使い方
- ③教育課程と具体的な計画の関係
- ④教育課程の改善

さらに加えて最近では教員に教育課程の改善についてこんな風にも言っている。

「最近の子はこうよね！と思ったら変えるべきです。何を！教育課程をです。教育課程って何かは子どもにとってどういう筋道で大きくなっていくかという大体の経緯、その道を『教育課程』と言います。筋道とは①園に入ってきた時はどうか。②4月、5月頃はどうか。③運動会の前と後ではどう違うか。④4歳の子はどうか。⑤5歳の子はどうか。だから保育現場の注意はこういうことです。これらのことをなんとなくではなく、皆で考え文字や写真にしていましましょう」

ここで伝えたいことは以下のことである。

- ①教育課程は何時改善すべきか。
- ②発達の道筋を知るとは子供の何を知ることなのか。

#### IV. 教育課程の編成の実際

実際に各幼稚園ではどのように教育課程を編成しているのだろうか。このことを熟知しないでは仮に教育課程にそった実習指導を望んだとしても肝心なところが抜け落ちる気がする。その基本的な考え方と留意事項を見てみる。

## 1. 教育課程編成にあたっての実際と基本的な考え方と留意事項とは

(1) 教育課程はそれぞれの幼稚園にそれぞれのものでなくてはならない。ゆえに各園で編成する必要があるものである。

幼稚園は満3歳児(3歳になった幼児は誕生日から入園できる)から5歳児までの幼児が入園できる学校である。同年齢(異年齢)の幼児が集団で一緒に生活することの中に、保育者がはいる、意図的に環境を整え、遊びを通して心身の発達を助長している。その際幼児が各年齢の各時期にどんな体験をすることが良いかを保育者が検討し、どのような目標をたてて、そのために必要な幼児の活動を予測して、そのねらいと内容を組織したものを教育課程と呼ぶ。

そのため教育課程は全国共通なひとつの決められたものではなく、各園の子供の状況や地域の状況を考慮し各園ごとに独自の教育課程がつくられる。

(2) 教育課程は保育者全員と園長とが協力して、園長の責任で編成するものである。

教育課程は園長の責任において作られる(編成される)が園長だけの考えで作られるものではない。常に目の前の幼児と接する保育者の協力のもと保育者全員で作られてこそ血肉の通ったものとなる。ゆえに保育者は自分たちで教育課程をつくるという積極的な姿勢が必要である。

(3) 教育課程を編成する時には基礎的事項について理解し、参考にしながらする。

基礎的事項とは

ア. 関係法令(教育基本法、学校教育法、学校教育法施行規則) 幼稚園教育要領な

どである。

イ. 子供の実態、幼稚園がある地域の実態を調べる

ウ. 幼稚園に対する社会的要求、保護者の要求を調べる

幼稚園教育要領の中に以下の様にある。

「幼稚園においては法令及びこの幼稚園教育要領の示すところに従い、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする。」と。つまり教育課程は幼稚園教育要領の中で編成されることが義務付けられているものである。

また、子供の実態とは今まさにその幼稚園で生活している子供たちのことをさす。10年前の子供でもなく、遠くアメリカで生活している子供でもない。今まさにここにいる子供たちにとってのその園の「教育課程」でなくてはならない。同時に、現代社会の中で幼稚園の果たす役割ということも考慮に入れる必要がある。例えば、都市化が進み、自然の中での体験が少なくなっている現実があるならば、意識して自然体験を組み入れる必要性もあるだろう。さらに保護者の要望に対しても十分に耳を傾けることが求められている。それらのことを考慮に入れることが教育課程の編成時には必要である。

(4) この幼稚園ではどんな子供に育てて欲しいのか(目標とする幼児像)を保育者全員で討議し理解する。

目標とする幼児像とは簡単に言えばこんな子供(人間)になって欲しいということである。教育には目標がある。つまりどんな子供に教え育みたいかということである。(間違ってもらっては困るが、そうならなければいけないということではない。)山登りに喩えるならどこの山を、どこの山頂を目指すかということである。それがあってこ

そ山岳隊の準備やコースが決まるのではあるまいか。

幼稚園は昭和22年に学校教育法の中で教育機関、すなわち学校と規定され、教育要領に準拠した公教育であるが、その内容についてはその園の独自性が尊重されている。それだけにしっかりとした教育目標が要求されており、それに向かう保育者集団としての共通理解が必要とされている。

(5) 子供たちが、どんな筋道をとって発達するのか、在園する期間の中で見通す。

教育課程とは入園から卒園までの子供たちの経験するもののすべて、園生活のすべてとも言える。しかしそれらはある一定の道筋のなかで移り変わっていくことも子供の姿から認められる。発達を見通すとは幼稚園生活の全体を通して、幼児がどのような発達をするか、どの時期に、どのような生活が展開されるかなどを長期的に見て予測することであるといえる。

また幼児の発達の過程に応じて教育目標がいかに関成されていくかについても考えていくことが必要である。

(6) 具体的なねらいと内容を時期に応じて考える。

幼児の発達の各時期にふさわしい生活が展開されるように適切なねらいと内容を設定することが大切である。この際、幼児の生活経験や発達の過程を考慮して、幼稚園生活全体を通して、幼稚園教育要領の第2章に示す事項が総合的に達成されるようにする。

(7) 教育課程はずっと同じものではないが、だからといって毎年のように変わるものでもない。

教育課程は園生活の大筋となるものであるから、それがあまり簡単に変わるものではない。しかし固定的な完璧なものとして考えるのではなく、常に見直しが必要とされるべきものである。教育課程の改善・改定は常に行われるべきものである。

## 2. 実践例 D幼稚園

次にD幼稚園での事例をあげながらできるだけ現実に沿って教育課程編成の実際を述べる

(1) 幼稚園教育要領を理解し、自園の建学の精神を知る。

ここで教育課程の編成過程を実際の幼稚園の例に沿って試みていくこととしたい。

教育の目的、幼稚園の目的は教育基本法、学校教育法の中で規定されている。

さらに幼稚園教育要領を理解しておくことは、幼稚園教育を行う上で当然のことである。

建学の精神とは園の設立の際に創設者がどのような目的でその幼稚園を作ったかということであり、その園の一番大切にしている幼児観や保育観といった教育を進める上での根本的な部分であると言ってよい。

(2) D幼稚園の建学の精神とは

D幼稚園の建学の精神は「いかせいのち」という言葉に表される。その意味は子供たち一人ずつのかけがえのない「いのち」を大切に、自分らしく、個性豊かに生きることを尊重する「保育の姿勢」である。

生命（いのち）とは文字どおり生物としての「命」であるが子供一人ひとりの「可能性」「個性」といったものも含まれる。

保育者は「生命（いのち）」を頂いた「有難さ」を感じて生きることを大切にしている。

これらについては新規採用時に対して園長から説明を受ける。この建学の精神は将来においても変わることはない。しかし時代の移り変わりの中で付け加えられるものも出てくることもある。

### (3) D幼稚園の教育目標(目標とする幼児像)とは

その次に明らかにしておく事は自園の目標とする幼児像である。つまりどのような子供に育てて欲しいかということである。

これらは設立時に建学の精神に基づき、規定されていることが多いので、すでに存在している。しかしどうしてそれらが導き出されたかという過程についてそこにいる保育者は知っておく必要があるだろう。

### (4) D幼稚園の創立当初の目標とする幼児像

- ①健康で明るい子
- ②思いやり豊かな子
- ③がんばる子
- ④よく考える子

### (5) 目標とする幼児像の変化

#### ①日常の子供の観察から

##### ア. 不安な子が増えている

D幼稚園では3歳の入園で大泣きをする子が減ってきている。新学期が年々静かになってきたという幼児教育者も多い。そのことの理由として園で行う未就園児のクラスなどができ子供が慣れているということあげている人もいるが、よく観察すると母子関係が希薄化しているような様子も伺える。つまりよい意味での濃厚な母子関係がなくなり、子供が入園時に母子分離するとき不安を感じることはない(感じる関係にない)場合も見られる。よって大泣き

はしないが、長い期間不安な状態がつづき、園での活動に入りきれない場合もある。

##### イ. わがままな子が増えている

自己の欲求をコントロールすることを学ぶことは子供の社会化をはかる必須課題である。これがなかなか育っていないことはすでにいろいろなところで言われている。実際そのことは解決されていない。少子化の進行のなかで子供たちは同年代の子供同士で遊ぶことが極めて減ったが、それ以上に大人集団の中で育つことが増えてきている。言うならば自分の要求がおお中でのみ生きているといった状態がわがままな子供たちを増やしている。そこで物事に耐える必要性を今の子供たちの中に感じる。

##### ウ. 自ら考えない子が増えている

最近の子どもを見るに付け、自分で考えない子どもが多いのに驚かされる。

正確に言うならば考えてみようとしないのであり、最初から諦めて考えないかまたは考えようとせず、すぐに答えを聞きにくる。当園でダンボールを利用して大きな乗り物を作った。先端を流線形にしたいのだが作品が大きいため今まで使っていたガムテープなどではうまく取り付けができない。すると自分たちでやらずに簡単に諦めて先生につけてくれるように頼むのである。

木登りをする子が少ないので木登りのしやすい斜めの木を植えたが誰も登らない。やってみたらと誘うと手をかけるところと、足をかけるところがわからないと言う。また、おとまり保育で銭湯にいくとびしょびしょのまま出てくる。「床が濡れてしまうよ」と注意しても解決策がわからない。どの子も知的に問題があったり体力的に劣ったりする子ではない。遊びや生活経験がないからといえばそうであろうが、経験がない中で考えようとする意欲が感じられない。



②園内研究を進める中での考察から

D幼稚園では1998年度から大きなテーマである「生きる力」の研究発表を3年にわたって行った。その年ごとに研究主題は違う。

初年度が「3歳児が生活習慣・技能を確立していく過程における教師の役割」、2年目が「最近の思春期の事件から幼児期に育てるべき力を考える」、3年目が「S君が人とかかわるようになる過程と基盤」で、どれも異なる保育者による発表であるが、すべてのテーマを園全体で考え進めていった。こうした園内研究の過程の中で、保育者の中で育てるべき子どもの姿というものが考察されさらに見えてきた。

(6) 現在の目標とする幼児像

以上のような子供たちの姿を保育者の間で確認をしたり、考察することでD幼稚園の教育目標(目標とする幼児像)の手直しが当然あった。そして目標とする幼児像は以下のように変わった。

- ①健康で明るい子
- ②思いやりが豊かで協力できる子
- ③物事に耐えてがんばれる子
- ④知的好奇心にあふれる子
- ⑤とらわれない心で創造できる子

(7) 子供たちの育ちの姿を大まかにとらえる

園として育てるべき目標とする幼児像は見えてきた。だがそれがどのような変化の中で達成されていくのか。そのことを考えてみなくてはならない。そのための方法として子供カードの制作をしてみた。

子供の姿カードの作成(図1)とは以下のものである。幼児の姿の中にこの時期によく見られる子供の生活の中でも姿を観察し書く。

〇期とは前もって主任が大きな区分で時期を提示する。

( 年度 ) ( 年齢 ) ( 〇期 )
<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">幼児の姿</div> <p style="margin-top: 5px;">大まかに見て、こうだと言えるその期の姿をとらえる。</p> <p>例 母親と離れるときに大泣きをする。 (似たような姿があればいっしょに書く)</p>
<div style="border: 1px solid black; display: inline-block; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">援助と環境</div> <p style="margin-top: 5px;">例 母親と離れたあと、家に電話をかけ落ち着かせる。 本人の好きな遊びに誘って気持ちを落ち着かせる。</p>

図1 幼児の姿カード

ア. 仮の期を設ける。

まず主任が年間の子供の姿を時期に分けてみた。

これはこの時期・行事あたりで子供たちの様子がちょっと変わるといふ大体的変化の節をとらえたものである。D幼稚園の期の分け方は年間を9の時期から10の時期にわけると細かい分け方である。この方が子どもの姿をありありと思ひ浮かべやすいという理由からである。

イ. その時期の子供の姿と思われるものを(援助と環境もあわせて)各保育者がカード(図1)に書き込む。細かい方が書き易い。

ウ. 年間の時期の流れが書いてある、大きな紙の上にあてはまるカードを保育者間で話し合いながら並べていく。

エ. カードの内容がその時期にはあまり見られない場合や違う時期に見られる場合はカードの置く場所を保育者間の話し合いの上変えていく。

オ. 時期の分け方自体が違っている場合は、節になる時期を変えることもある。

カ. それぞれの時期の代表的な子供の姿を大まかに分けて表す。

キ. 最終的に年間をIからVの期(時期ではありません)に分け共通できるものをまと

める。その期の子供の気持ちや活動のポイントを後述するキャッチフレーズで表してみる。(最後に3、4、5歳児の教育課程を参考に載せました)

#### (8) ランダムに出された子供の姿

##### ①3歳児①②の時期の姿

- ・上履き、タオルなどしまえないと言って大泣きする。
- ・帰りのバスを待っていていつ帰れるか不安で泣いてしまう。
- ・部屋に入ることをいやがりおやつを食べようとしない。
- ・園にきて遊ぶがその遊びがつまらなくなると帰ってしまう。
- ・お姉ちゃんがよいと言って、なかなか離れない。
- ・じっと外を見ている。
- ・誉められたり、注目されたりすると困ってしまうようで泣いてしまう。
- ・自分の好きな場所を見つけては参加し楽しむ。

②さらに変化する子どもから教育課程の変化さらに平成22年に子育て支援クラス「ひよこ組」が出来た。それは週に2日から5日で、その子の様子に合わせ保護者から離れ子ども単独で登園できる保育形態である。

その結果、先に挙げた3歳児初期の姿が見られない子も多く出てきた。しかし本来の3歳児とひよこ組出身者の保育の融合の課題も出てきた。これらが教育課程の変化のポイントともなる。

##### ③4歳児③④⑤の時期の姿

- ・お店屋さんごっこで年少児に優しく接する。
- ・生き物の生長、植物の成長を喜ぶ
- ・夏休みの出来事を皆の前で話すことを

喜ぶ子もいるが嫌がる子もいる。

- ・自分たちで虫を探す
- ・綱引きで負けないように力いっぱい掛け声をかけ引っ張ろうとする
- ・友達の頑張る姿を認めたり、励まそうとする姿が見られる。
- ・やりたいという気持ちはあるが上手く活動が進まない
- ・友達関係が深まったのか友達と話をしていて保育者の話を聞こうとしない
- ・同じ思いのもと、気の合う仲間と遊びを楽しむ。
- ・まま友達を認め、受け入れる。
- ・次はこうと見通しをもって行動できる。

#### (9) 各期の子供の特徴的姿をとらえる

こうした様々な姿から共通の項目を集めて分類する。例をあげれば4歳児第Ⅲ期(④⑤の時期)ならば、

- ①夏休み明けの不安な姿
- ②友達との関わりがあるが、ところどころ思うようにならない姿
- ③運動的な遊び・活動が盛んになる姿。
- ④遊びが移り変わったり、発想が豊かに広がっていく姿。

#### (10) 代表的な姿に対してねらいを設ける

上記のように各期ごとに子供の代表的な姿の項目を挙げる事ができた。

4歳児第Ⅲ期ならば、同じように子供の姿から「ねらい」を下記のように設定した。

ア. 皆と一緒にいろいろな遊びに取り組み、楽しさを味わう。

イ. 友達と一緒に力を合わせて取り組み、最後まで頑張れることができる。

この際、一緒に力を合わせてという言葉から「協力できる子」という園の教育目標がねらいの中に含まれていることがわかる。



このように園の教育目標は、ねらいという形で現れることもあるが、いつも出てくるとは限らない。

#### (11) D幼稚園の教育課程の特徴

D幼稚園の教育課程には見慣れない項目として「キャッチフレーズ」があるが、これはその時期の子供の気持ちを一言で言い表したものである。

保育者は「子供がこんな気持ちでいる。」「こんな風に言ってくれたらいいな」と思いながら保育をすることを心がけましようというわけである。「大切にしたいこと」は子供の「発達の中で大切にしたいこと」とも言うべきものである。別な言い方をすると「子供たちが成長する過程の中で経験していく内容」であると言ってもよい。これらはD幼稚園としての独特の項目であるが、いろいろその園で工夫してみると、自分たちで使いやすいものになる。

#### V. 教育実習の課題

長々と、D幼稚園の教育課程編成の実際を見てきたが、こうした教育課程の編成までの実際を知り得て実習にむかうことが学生の中にどれだけあろうかと常に疑問に思うからである。

百歩譲って各園の教育課程は勿論、具体的なものは知らなくとも、(実習者の知識として)各園の毎日の保育実践がその園の心棒とも呼ばれる教育課程の中で生み出されていくことを、認識しているか、また養成校の中で教授しているかという疑問である。

教育実習の目的は違うところにあるという方には、教育課程を無視しての教育実習が保育の真の姿を学ぶとは言いがたい、と主張したい。

#### 1. 実習園の側の問題

こうした教育課程をふまえた中で実習をするとすると実習園は少なくとも、実習の時期(例えば一年の6月中ならその時期の)の子どもの姿を実習生には知らせる必要がある。あえて強く言うならば、そのことを知らせない中で実習を受け入れる実態が恒常的に無いだろうか。子供の姿は責任実習(一日実習)の前のおよそ2週間において実習生たちは捕らえ感じなければならないかもしれないが、その園としての教育課程は抜きにできない。

また送り出す養成校としても、そうした教育課程を意識した教育実習への指導がなされているか。実際45%の学生しか教育課程を意識した実習をしていない実態である。

#### 2. 解決策

そもそも実習の目的とはなにか? 実習の目的が「よき社会人をつくる」であるならば、挨拶の励行。遅刻・欠席の禁止などであってもなんら差し支えない。しかし実習の目的は保育者としての専門性を実際の保育教育の中から学ぶことであろう。

ここで幼児教育の専門性とは何か考えてみたい。

- ①子どもに対する十分な知識と技能を保育者が持つ。
- ②子どもに対する長期的な発達の見通しを保育者が持つ。
- ③それを基にした具体的なねらいと内容を組織し、子どもに対する配慮と注意の実行ができる。
- ④環境による教育という幼児期ならではの教育法を踏まえ子どもとの関わりがとれる。同時に環境の構成ができる。

以上のことを考えてみた時、教育課程の役割はきわめて大きいのである。

養成校では専門性①に対しては各講義の中で十分に行っている。専門性②については概要的な発達に関する講義はあるであろう。

ここで実習の大きな目的が①と②を踏まえた③であることを忘れてはならない。特に責任実習の課題はまさにここであると認識しなくてはならない。

つまり6月の実習で来た学生はどんな姿を見せる3歳児に出あうのか？そしてその姿の前にはどんな姿があるのか知り、そしてどうなって行くのかを考える。このことが「見通し」をもったという言葉の意味である。

(勿論4歳児、5歳児に配属されることもある)その下地のうえで、責任実習のとき「何をするか」が出てくるのである。

再度になるが、「その日何をするか」つまり実習でいえば(本時の活動)のあり方は、当然子どもの姿の前とこれからを加味したものでないとならない。その指導が各実習の園で学生に分かりやすく十分になされているだろうか、はなはだ疑問である。前段でいかにして各園の教育課程が作られるかをかなりの紙面をとって説明したのは、そうした過程を経て作られた教育課程だからこそ、実習の一日を、教育課程を十分に子どものために使うべきだという強い考え方からで出たものである。

どちらにしろ、教育課程的な見方を実習のなかに入れることが、養成側、実習園側に今求められる最大の課題である。

## VI. 実習における幼児教育方法のあり方

養成校にいる時に、(学生が教育実習に行って何歳児担当になるか分からない時に)活動(本時の保育)を決めるようなことがあってはならない。その活動をとらうる、必然が幼時の発達という流れの中に見えなくてはならないからである。

さらに、幼児教育の方法がつまり実習の

方法が、保育者が前に立ち何かをさせる旧態然としたものであることを前提に考えているかのような指導も今後考えねばならないことであろう。何かを子どもにさせなくては実習にならないことからの意識の開放が今養成校にも現場にも求められている。よく言われる幼児教育における主体性とは何か。環境による保育とはどのようなことを、遊びを重視するとはどのようなことを意味するのか。これらが一番幼児教育の難しいところだが、実習で教育課程的思考を抜きにして、何かを子どもにさせることで、真の幼児教育とは何かが曲げられて伝わってしまう気がしてならない。

教育課程的思考を身に付けた上で、実習時の教育方法を選び、幼児の活動を構想すべきであることを、養成校では学生に教えるべきである。

## 参考文献

- 1) 教育課程総論 北大路書房 2005 小田 豊 神長美津子編著 第8章 小林研介 99から110ページ
- 2) 幼稚園教育要領ハンドブック 2017 無藤 隆監修 Gakken 第1章から第4章 28から78ページ
- 3) 幼稚園教育要領・保育所保育指針 新旧 対照表 文部科学省 2017

3歳児教育課程

指導の重点	自分のしたいことがあり、それに取り組める									
	I			II			III			IV
期	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
キヤッチ フレーズ	・ドキドキわくわく幼稚園 ・幼稚園ってなあに？			・水あそびって面白い！ ・暑さなんかには負けないぞ ・先生だーい好き！！			・よいしーがみほるぞ！！ ・秋見一つけた			・ねえ見て！観て！！ ・寒いのとんだけ！！
たいせつにしたい こと	・初めての集団生活に対する喜び と不安			・大好きな先生やお気にしりの 遊具でのおそびを楽しむ ・自我の目覚め（友だちの存在を 知る）			・自己探知期（好奇心や興味をも つて、みずから意欲的に参加す る姿）			・友だちとの関わりを楽しいと感 じること（クラスの友だち関係 の広がり）
子どもの姿	<ul style="list-style-type: none"> <li>・お母さんから離れて登園すること とが不安で泣き出す（緊張、 興奮）</li> <li>・トイレ、手洗いや保育者に 手伝ってもらいながら生活のり えんを知る</li> <li>・保育者といっしょに歌をうたつ たり、手あそびを楽しむ</li> <li>・先生といっしょに遊びかけつこ やスキップツツツつをとり、保育者 に親しみをもつ</li> <li>・好きなあそびや気の合う子を見 つけられ、園生活を楽しむ</li> <li>・線本や紙芝居などを見て楽しむ、 またおやつを食べたら帰れるこ となど、生活をとおし園でのり えんを喜んでいく</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・園にある遊具に興味をもち、好 きなことに意欲的に取りまわす ・保育者に甘えたり、要求を言っ てくる</li> <li>・おそびのなかで「入れて、貸し て」などの会話をやりとりを左 だちと交わり、おそびに関わ うとする姿</li> <li>・自我が目覚め、ものを取りか うなど、おそびのなかのささいな ことでもけんかがかかる</li> <li>・自分の思ったことしたことを 保育者に話そうとする</li> <li>・音楽に合わせて体を動かしたり、 簡単な動きで表現したりするこ とを楽しむ</li> <li>・テレビやパソコンのヒーローにな りきってごっこあそびを繰り返す ・手洗いや着脱、排泄など自分で できることはやってみようとする</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生の用意してくれたものを使 って、側ごっこを楽しむ</li> <li>・集団生活のルールがわかり、 みなど行動する喜びを理解する</li> <li>・他人のものをたいてせつにする姿 ・自分のアイメージを他人に譲った りすることが出来る</li> <li>・友だちとのごっこあそびや遊形 活動などで自由に表現しよう とする</li> <li>・行事をとおして他の学年と交流 をもち、仲間に入れてもらった りするなか、みなで遊ぶ楽しさ を感じる</li> <li>・全身を使って遊ぶ楽しさを味わ う</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表会などたくさん人の前で 自分を表現する</li> <li>・さまざまな素材におかれて、自分 のアイメージに合わせて形をつく る</li> <li>・手先の器用さがまし、ハサミな どを使い、切ったりすること を楽しむ</li> <li>・自分なりの表現を認めてもら たり、ほめてもらえることを喜 び、意欲をもって表現活動を行 なう姿</li> <li>・伝説的なあそびや狐士のおそび を楽しむ（正月あそび） ・みなで使うものなどをたいてせつ に使うようになる</li> </ul>
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> <li>・喜んで登園し保育者に親しみを もつ</li> <li>・園生活の流れを知り、所持品の 始末を少しずつ自分の力でやれ るといえる</li> <li>・好きなあそびを見つけて、楽しめ たいいな（自分の興味のある もの、場所を見つめる）</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・保育者といっしょに遊ぶなかで いろいろな素材におかれたり、気 の合う友だちを見つかけられると いえる</li> <li>・園生活の流れがわかり、生活 のりえんに慣れるなかにある決ま りや約束ごとに気がつき、守って いけるといえる</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・体を十分に動かして、いろいろ な運動を楽しめたいいな</li> <li>・自分なりにやりきって遊ぶなか で、友だちとの関わりを楽しめ るといえる</li> <li>・うたったり、おどったり、何か しめるなど表現することを楽し むといえる</li> <li>・生活のしかたを手順よくできる よう、自分なりにくふうしよう とする</li> </ul>			<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分のアイメージしたものに きって、表現することを楽しめ るといえる</li> <li>・楽しさに負けず、すすんで体を動 かせたいいな</li> <li>・自分の要求や感じたことを率直 に言葉で伝えたり、さまざまな 方法で表現したりする</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・なかよしの友だちと遊び通 すなかで、遊戯を楽しみに待 てたいいな</li> <li>・友だちと遊んだり、生活をし たりすることを楽しむ、いっし よに行動することが出来る</li> <li>・生活のなか、自分なりに行動 し、自信をもって生活を送れ たいいな</li> </ul>						<ul style="list-style-type: none"> <li>・これでできるかな？</li> <li>・もうすぐ年中さん！</li> <li>・みなでいっしょに遊ぶぞう</li> </ul>			

4 歳児教育課程

指導の重点 ・自己の興味関心を深め遊びこめる ・友だちと遊ぶ楽しさを感じる(あそびの深まりと友人関係の広がり)

期	I			II			III			IV			V		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3			
キヤッチアレーズ	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫			
	～友だち 幼雅園つておもしろい ～友だち あそび 楽しいつばい～ ・幼雅園・先生・友だち大好き ・子どもは風の子 ～元気に伸び伸びと～		・青い空の下で ～伸び伸びと夏を楽しもう～ ・雨と遊ぶほう		・一人より二人、二人よりみな ・TRY TRY TRY ・よ～しゃってみよう		・みながいつしよって最高 ・みなでつくるう遊ぼうよ ・みんなの心を1つにしよう		・みながいつしよって最高 ・みなでつくるう遊ぼうよ ・みんなの心を1つにしよう		・みながいつしよって最高 ・みなでつくるう遊ぼうよ ・みんなの心を1つにしよう		・みながいつしよって最高 ・みなでつくるう遊ぼうよ ・みんなの心を1つにしよう		

たいせつにしたいこと

- ・進級入園の喜び (保育者や友だちへの関心)
- ・友だちへの関心 (保育者や友だちとのふれ合い)
- ・期待・戸惑い・不安・安定→自己の芽ばえ
- ・友だち関係の深まり→自己発揮
- ・ともどかさのくり返し
- ・クラスの間意識→力を合わせ
- ・一歩足際→自信
- ・失敗をくり返しながらか、挑戦する姿 実行困難
- ・いろいろなあそびに関心をもち、みずから関わろうとする姿→視野の広がり
- ・夢やイメージの豊かさ、広がり
- ・なりきる楽しさ→表現する楽しさ
- ・年長への憧れ→期待や不安→自己発揮
- ・みなでやりとげた喜び (満足感)

子どもの姿

- ・進級し大きくなったという喜びの姿とともに新しい生活に戸惑いや不安の姿が見られる、また、保育者(旧担任)や以前からつながりのある友だち(旧クラス入)知つていいる遊具やあそびによつて安心して生活をやる姿が見られる
- ・新たな大型遊具木などに興味をもち何でもやってみたいと意欲的であるが、思いに体がともなつていけないことが多い
- ・新しい友だちなどに興味があしずつ芽ばえ、自分なりに楽しみながら遊ぶ
- ・保育者や友だちへの関心やあそびの興味が薄まり園生活が安定してくると、言葉のやりとりがあふえ、そのなかで悪風のかい進いが生じトラブルがあふえてくる
- ・気分が解放され始め動きも随分活発になるが、その反面季節の変わりめなので、つかれが目立ちあそびも移り変わりが多く停滞することもある
- ・他の友だちや年長児の姿を真似たり考えたりしながら、やつてみようとする姿が見られる
- ・長い休み明けの後で、園生活に期待をもつて登園する反面、不安を抱く子もいる
- ・目的に向かつていろいろなことに挑戦したり、年長児や他の友だちの影射を受けて、互いに競い合つたりする姿が見られる
- ・個々のグループからみなで遊ぶことが、自分の思いが通らなくなつたりすると、途中で抜けけしてしまうことがある
- ・交友関係も広がり、友だちのくあうやイメージを認めたり、上取り入れながらかあそびを盛り上げていく
- ・自分のイメージを膨らませながらかごつこあそびなどを楽しみ、いろいろな試したり考えながらか遊ぶほうとする
- ・行事とおしげのイメージが共有されることがあつたり、自信をもつて何ごとにも取り組むことができ
- ・異学年との関わりがあふえ、友だちや年長児の姿を自分のあそびに取り入れようとしたり、互いに教える姿が見られる
- ・年長への憧れが強くなり、折り返し、楽しみに待つ反面、新たな場への戸惑いもある
- ・興味のある場が広がり、自信をもつて何ごとにも取り組むことができ、相手の意見を聞いたり、自分の意見を伝えることができる

ねらい

- ・喜んで登園し新しい生活に慣れることができるいいなあ
- ・好きなあそびや場所をみずから見つけ、関わつてあそびが楽しめたいいいなあ
- ・いろいろな遊具や素材に興味をもち、気の合う仲間と興味のあるあそびを見つけて、じっくりとあそびが楽しめたいいいなあ
- ・自分の身のまわりすることに、進んで取り組めたいいいなあ
- ・みなといつしよにいろいろなあそびを取り組み、楽しさを味わえたいいいなあ
- ・友だちとあそびが楽しめたいいいなあ
- ・友だちとあそびが楽しめたいいいなあ
- ・友だちとあそびが楽しめたいいいなあ
- ・友だちとあそびが楽しめたいいいなあ
- ・いろいろな素材におふれイメージを高めながら、友だちと相談したり、あそびが楽しめたいいいなあ
- ・園行事などの機会をおしめて年長への期待をもち、楽しみに待つてたいいいなあ



5歳児教育課程

指導の重点	自立と思いやり (集団のなかで自己を十分に發揮するとともに、相手の立場にたつて行動できるようにする)														
期	I			II			III			IV			V		
月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6
キヤッチ	・仲間といっしょに楽しもう ・考えて試してチャレンジして ・全身を使ってたくましく ・クラスでゲームでがんばろう ・力を出して力を集めて遊ぶ (個性とチームの充実、協力、仲間意識) ・豊かにイメージと表現 ・表現する満足感												・自信と自覚と期待 ・友だちを認め助け合いながら自主的に生活する ・園生活の充実と満足		
フレッシュ	・新しい生活への喜び、期待、実感、達成、自覚 ・戸惑い・緊張→安定→自己發揮・解放感												・年長組になった喜びや期待、自覚から係活動、年少中児の世話、年長ならではのあそびに意欲的に取り組み、はり切つて生活する ・進級を喜び一方で、新環境に対して戸惑いや不安がある子もいる (しかし、それぞれに適応しようとながらばっている) ・自分の好きな友だちやあそび、興味をもつたことに、自分なりに取り組み解放的に遊ぶ (心も体も解放的になるとともに新しい友だちとの交流も生まれるが互いに思いを伝え合う環境にはなっていないので援助も必要)		
たいせつにしたいこと	・友だちへの関心が広がり影響を受けて自分でも挑戦したり、自信をもち意欲的に遊ぶ (なかにあきらめてしまう子もいるが、友だちの意欲を認めていくことで挑戦しようとする) ・今までの経験をもとに、自分たちで試行錯誤したり主張し合いながらグループであそびを進め楽しんでも遊べるようになるが、主眼の場合や力関係などで遊んでいる場合もある) ・知的好奇心が旺盛になり、積極的に考えたりふれたり酬べたりする												・クラスやグループの友だちと自分たちで次つきとイメージを豊かにさせたり、さまざまな表現やくあそびをしながら、あそびを充実させ楽しんでいる ・一人ひとりの力も充実してきてじっくり活動に取り組みようになる ・交友関係が広がり、いろいろな友だちと役割を分担したり協力し合ったり認め合ったりしながらいっしょに遊ぶようになる (仲間のなかから遊ぶようになってくるが、なかには役割が固定化してしまっている)		
子どもの姿	・友だちへの関心が広がり影響を受けて自分でも挑戦したり、自信をもち意欲的に遊ぶ (なかにあきらめてしまう子もいるが、友だちの意欲を認めていくことで挑戦しようとする) ・今までの経験をもとに、自分たちで試行錯誤したり主張し合いながらグループであそびを進め楽しんでも遊べるようになるが、主眼の場合や力関係などで遊んでいる場合もある) ・知的好奇心が旺盛になり、積極的に考えたりふれたり酬べたりする												・グループ相互のあそびにも関心をもち、互いに交流し友だちを尊重しながら大きなままとはいく ・クラス全体の活動にも見通しや計画性をもつようになり、そのなかで自分の役割を意識したり、クラスの一員としてできる ・小学校や卒園に対する喜びや期待もあるが、不安や戸惑いのある子もいる		
ねらい	・年長になったことを喜び、期待や自覚をもつて新しい生活に進んで取り組めたい ・自分の好きなあそびや興味をもつたことに積極的に取り組み、解放的にあそびを楽しみたい ・あそびを通して目的をもち進んでいく楽しさを味わいたい ・さまざまな素材やあそびに親しめたい												・友だちとあそびを進めながら、友だちとの関わりを充実させたい ・クラスやグループの友だちといっしょに、くあうしたり協力し合いながら、友だちとの関わりを広がらせていきたい ・イメージを豊かにさせたり友だちのイメージを受け入れたりしながら、あそびを広げ深めていきたい		